

肉用鶏農場での *Campylobacter* 浸潤に関する
疫学調査 - 第2報 -

京都府中丹家畜保健衛生所
矢野小夜子、吉良卓宏

食の安全が重視される中、食中毒の原因菌のひとつである *Campylobacter* について、一肉用鶏農場で浸潤状況と疫学的調査を行ったので概要を報告する。

【方法】平成15年4月から18年12月にかけて肉用鶏農場Aで、複数の鶏群や飼料、飲水やネズミの糞等を材料に分離培養を行い *Campylobacter* の有無を調査した。また、本菌の鶏群への侵入が雛由来であるかを確認するため、A農場から分与された12日齢雛3羽を当所実験室内で8週齢まで飼育し、本菌の浸潤について農場の同一ロット鶏と比較した。分離菌はPCR法で同定後、PCR-RFLP (restriction fragment length polymorphism) 法で菌体鞭毛の遺伝子型別を行い、A農場近隣のB農場や他の系列農場、採卵鶏農場由来株とも比較した。

【結果及び考察】A農場では、鶏が4~6週齢になると *Campylobacter* が鶏糞から分離され始め、出荷時にはほとんどの鶏群に浸潤した。一方、農場の他の材料からは検出せず、実験室の鶏からも検出されなかった。分離株は全て *Campylobacter jejuni* (*C.j.*) で、鞭毛遺伝子型別で数種のパターンに分類され、鶏のロットによって検出パターンは変動した。また、B農場由来株とは共通のパターンを示し、他農場由来株とは異なるパターンを示した。以上のことから、A農場と近隣農場は疫学的関連があり、媒介要因の存在が示唆された。